

溝井 優香  
MIZOI Yuka



脈/環

[1,2]ガラス、珪砂 [3]ガラス、陶土

## 脈/環

人為的そして自然的な痕跡は長い時間を経て積み重なり、ふとした外部からの影響で過去の痕跡が現れる。そういった無意識のうちに現れる過去の時間や記憶に魅力を感じ、そこに着目して制作を行った。私たちは、時間と環境に身を委ね、流れるように日々を過ごす中で、無意識のうちに様々な形で痕跡を残している。例えば、足跡等の目に視えるモノ、あるいは匂い等の目に視えないモノである。

ガラスの流動的な痕跡は、時間の流れだけではない、脈々と繋がる生命の連鎖のようなものを感じる。私は主にキルンキャストという技法を用いて制作している。ガラスの基となる珪砂を熱し、ガラスへと変わる過程で発生する発泡という動きを、作品として表現することを追究してきた。キルンキャストでは、石膏型にガラスと珪砂を詰めて焼成するため、焼成中はガラスと珪砂がどういった動きをしているのかは目視することが出来ない。徐冷が終わり、石膏型から外すことで初めてガラスと珪砂の動きを視ることが出来る。それは私にとって、時間を経て垣間見える過去の痕跡に繋がっていると考える。また珪砂がガラスに変わる前の発泡の段階で留めることで、ガラスの過去の痕跡に触れることができる。また造形していくうえで、痕跡の重なりが今ある空間を形成していく事を意識した。私はその空間の形成を痕跡による肉付けされた空間の形として捉えている。空間にある過去の痕跡を私の手によって肉付けし、覆い隠すように形作る。ガラスとして焼成し型から外すことで、前述した外部からの活動により埋もれていた時間と記憶が呼び起こされる。私は、制作を通してそれらの記憶と時間を探り、視覚化していきたいと考える。

過去の痕跡を辿ること。私が意識して視ていない過去の時間と空間を探ること。

その行動を制作することに移し、表現する＝痕跡を残すこと。

そうすることで、痕跡と対面した時に、誰にも視られず消えて失われそうな時間と記憶が再び甦り、私たちに語りかけてくる。